資料４

公立大学法人前橋工科大学

令和５年度業務実績に関する評価報告書（案）

令和６年１０月

前橋市公立大学法人評価委員会

目次

Ⅰ　評価の考え方　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

1　基本的な考え方

2　評価方法

Ⅱ　全体評価　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅲ　項目別評価　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

1　大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するための取組
(1) 教育に関する目標を達成するための取組
(2) 研究に関する目標を達成するための取組
(3) 地域貢献に関する目標を達成するための取組
(4) 国際交流に関する目標を達成するための取組
(5) 教員の資質向上に関する目標を達成するための取組

2　業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するための取組

3　財務内容の改善に関する目標を達成するための取組

4　自己点検・評価及び情報公開に関する目標を達成するための取組

5　その他業務運営に関する重要な目標を達成するための取組

用語解説　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

委員名簿　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

Ⅰ　評価の考え方

前橋市公立大学法人評価委員会は、地方独立行政法人法の規定に基づき、公立大学法人前橋工科大学の令和５年度の業務実績について、次の考え方等により評価を実施した。

１　基本的な考え方

(1)　中期目標の達成に向けた、法人の中期計画及び年度計画の実施状況を確認する。

(2) 法人の特筆すべき取組や成果を積極的に評価する。

(3) 評価を通じて、法人の管理運営、大学の教育研究の質的向上を図る。

(4)　法人の管理運営、大学の教育研究などの実績及びそれに対する評価は広く関係者に公表する。

２　評価方法

(1) 評価の進め方

年度業務実績評価は、法人から提出された「令和５年度業務実績に関する報告書」を踏まえ、その自己点検及び自己評価の内容が適切かどうかという視点で「全体評価」及び「項目別評価」を行う。

(2)　「全体評価」

令和５年度の法人の業務実績全体について総合的な評価を行う。

(3)　「項目別評価」

中期目標における目標区分ごとに業務の実施状況を確認し、４段階の評価基準により評価を行うとともに、特筆すべき点や今後に期待する点についての講評を付す。

（目標区分）

１　大学の教育研究等の質の向上に関する目標	
(1) 教育に関する目標	年度計画 No. 1～No. 14
(2) 研究に関する目標	年度計画 No. 15～No. 23
(3) 地域貢献に関する目標	年度計画 No. 24～No. 32
(4) 国際交流に関する目標	年度計画 No. 33～No. 34
(5) 教員の資質向上に関する目標	年度計画 No. 35～No. 40
２　業務運営の改善及び効率化に関する目標	年度計画 No. 41～No. 45
３　財務内容の改善に関する目標	年度計画 No. 46～No. 54
４　自己点検・評価及び情報公開に関する目標	年度計画 No. 55～No. 58
５　その他業務運営に関する重要な目標	年度計画 No. 59～No. 76

（評価基準）

評点	定義
A	中期計画の達成に向けて特筆すべき進捗状況にある。
B	中期計画の達成に向けて概ね順調な進捗状況にある。
C	中期計画の達成に向けてはやや遅れた進捗状況にある。
D	中期計画の達成に向けては進捗が著しく遅れており、 重大な改善事項がある。

【参考：法人による自己評価の評価基準】

評点	定義
A	年度計画を上回って実施している。
B	年度計画を計画どおりに実施している。
C	年度計画をやや遅れて実施している。
D	年度計画を実施していない。

Ⅱ　全体評価

令和５年度は、学群制を開始して２年目であり、各プログラムの専門科目の授業の開始や新たに設置した二つの研究センターで４件の共同研究が開始されるなど変化の最中の年度であり、⑨新型コロナウイルス感染症が感染症法上の５類に移行したことにより従来まで制限されてきた地域貢献事業や海外大学との国際交流が再開されるなど、変化の多い年度であった。

さて、①③⑧⑮令和５年度の業務の全体の実施状況は、業務実績に関する報告書において７０項目のうち年度計画を上回って実施しているＡ評価が３項目、年度計画どおりに実施しているＢ評価が６７項目で、７０項目のすべてがＡ評価又はＢ評価であった。全体としては年度計画に沿って順調に実施されているため、全ての業務実績についてＢ評価以上とする。

なお、業務実績に関する報告書中の「特筆すべき成果」では、地域貢献の項目において、⑤⑩４年振りに開催された市民向けの科学教室が挙げられている。これは、こどもたちが理科や科学技術への興味・関心を持つきっかけになるとともに、８０％を超える前橋市内からの来場者に対して前橋工科大学に対する関心を高める重要な成果を上げた。

また、国際交流の項目において、⑫協定締結大学に加え、さくらサイエンスプログラムを活用した新たな国際交流の取組を行ったことは、今後の国際交流

事業の拡大と充実につながり、教員の研究及び学生の学びの幅を広げることとして、高く評価できる。

そして、⑲財務内容の改善に関する項目において、ＰＲ用パンフレットのリニューアルや周知方法の改善等により令和５年度のふるさと納税による寄附金総額が大幅に増加し、過去５年間で最高額となったことは、法人への関心と期待の高さの表れであるとともに、自主的自立的な大学運営の一助となるため、評価できる。

一方、⑬令和５年度の業務実績において課題が出ている項目（授業改善アンケートの回答率の向上、数学・理科科目の授業体制の変更に対する課題など）については、課題解決に向けた取組を着実に実行し、学生・教員にとってより充実した教育の場となるような改善を期待したい。

また、⑭令和５年度は中期目標期間の５年目であり、中期計画における数値目標未達の項目に対して目標達成に向けた取組を加速する必要があったが、（１）学術団体論文誌等への論文の掲載数、（３）市内・県内企業との共同研究実施件数、（４）外部資金の金額については、計画未達となっており、いずれの項目も令和４年度より実績が低くなっている状況にあることから、目標達成が懸念されるため、積極的な取組を期待したい。

結びに、令和６年度は中期目標期間の最後の事業年度にあたる。令和７年度から始まる次期中期目標期間も見据え、中期計画の進捗状況を再確認し、中期目標の達成に向けて着実に取り組んでいくことが重要である。大学の総力を結集し、さらなる大学の充実・発展が図られることを期待して全体評価の総括とする。

Ⅲ　項目別評価

1　大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するための取組

(1) 教育に関する目標を達成するための取組

評価委員会評価	法人の自己評価の項目全体では、１３項目のうちすべてがＢ評価とされた。評価委員会としての評価も、全体的には概ね順調な進捗状況であると評価できる。また、学修サポーター制度は、利用者及びサポーターの双方に良い影響を与える取組であることから、今後の工夫を期待する。	B （概ね順調）

評価結果

評価者	全体項目数	A		B		C		D	
		項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比
法人	13	0	0%	13	100%	0	0%	0	0%
評価委員会	13	0	0%	13	100%	0	0%	0	0%

■特筆すべき事項及び評価できる事項

（№数字＝令和５年度業務実績に関する報告書における年度計画№）

・学修サポーター制度の試行（№1）

利用者の学修支援のためだけでなく、学修サポーターに対する教育効果も期待できる。本格実施にあたり、利用者に対しては利用ルールを定めるなどして、サポーターが利用者から過度な負担を負わない環境が整っているか、サポーター学生に対しては、基本的な対人スキル及び効果的な支援方法に関する研修を実施する体制になっているかの確認を行い、制度を整えていくことを期待する。

・数学及び理科科目の変更点の課題解決に向けた取組（№3）

数学及び理科科目の変更点についての検証を教員自身が丁寧に実施することで変更点についての課題を早期に認識し、授業形態を学生・教員双方にとってより良い形に変えていく取組は評価できる。検証の結果、どちらの科目においても、より公平性を重視したクラス編成を行うことが望ましいとの課題が認識されていることから、課題解決に向けた今後の取組に期待する。

・志願者数の増加（№5）

入学者選抜試験の実施では、18 歳人口が減少している中で、志願者数が昨年度に比べて増加しており評価できる。大学の魅力とともにアドミッションポリシーを適切に発信し、高校生から選ばれる大学であり続けることを期待する。

・内部進学の促進及び増加のための広報活動（№7）

大学院入学者数・内部進学者数ともに令和６年度は過去最大となっており、広報活動がうまく機能していることを裏付けている。また、最近の数年間で内部進学者が倍増していることも評価したい。

■今後に期待する事項

下記の事項に関しては、年度計画の着実な実行及び中期計画の達成に向け、さらなる取組を期待したい。

・学修成果アンケートの実施（№2）

アンケート結果から改革の効果が見られても、回答率が減少傾向にあっては説得力が弱いように思う。回答率を上げる工夫を望む。

・大学院科目の早期履修制度の改善（№8）

受講学生へのアンケートによって、早期履修科目が大学院進学のモチベーションとなったのかどうかの検証も必要である。

(2) 研究に関する目標を達成するための取組

評価委員会評価	法人の自己評価の項目全体では、９項目全てがＢ評価とされた。評価委員会としての評価も、全体的には概ね順調な進捗状況にあると評価できる。 共同研究数及び論文投稿数がともに増加したこと、二つの研究センターを新たに設置して活動を開始できたことは、今後に期待できる取組として高く評価できる。	B （概ね順調）

評価結果

評価者	全体項目数	A		B		C		D	
		項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比
法人	9	0	0%	9	100%	0	0%	0	0%
評価委員会	9	0	0%	9	100%	0	0%	0	0%

■特筆すべき事項及び評価できる事項

・論文投稿数の増加　(№17)

論文投稿数については、令和４年度が突出しているものの、概ね増加傾向を維持していると言える。引き続き、掲載数においても増加傾向を維持できるよう、意識啓発を期待する。なお、このような大学側の意向を悪用した、いわゆるハゲタカジャーナル※1による被害も一般には増えているので注意喚起を行うとともに、インパクトファクター※2等の質についても向上させ、結果的に外部資金の増加や目に見える形での成果に繋がっていくことを期待したい。

■今後に期待する事項

下記の事項に関しては、年度計画の着実な実行及び中期計画の達成に向け、さらなる取組を期待したい。

・関係機関や企業との連携強化（№15）

市内・県内企業との共同研究実施件数は、目標値の３０件を大きく下回る１２件であった。県外企業も含めた共同研究実施件数も公募型共同研究を含めて３１件であり、過去５年平均件数以下となっている。延長変更契約や約２年に及ぶ研究等があるという要因もあり、実質的な研究数が大き

く減少したものではないが、目標値達成に向けた取組は強化する必要がある。

(3) 地域貢献に関する目標を達成するための取組

評価委員会評価	法人の自己評価の項目全体では、９項目のうち１項目がＡ評価とされ、残りの８項目がＢ評価とされた。評価委員会としての評価も、全体的には概ね順調な進捗状況にあると評価できる。特にＡ評価とした項目として、４年ぶりにこども科学教室を対面開催し、来場者が増加するとともにアンケート結果からも好評なイベントであったことは評価できる。	B （概ね順調）

評価結果

評価者	全体項目数	A		B		C		D	
		項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比
法人	9	1	11%	8	89%	0	0%	0	0%
評価委員会	9	1	11%	8	89%	0	0%	0	0%

■特筆すべき事項及び評価できる事項

・公開講座の開催　(№26)

利用者の利便性向上のために全講座について対面とオンラインのハイブリッド方式での開催を初めて実施することにより、過去最高の受講者数となったことは評価できる。

・こども科学教室の開催　(№27)

４年ぶりの対面開催を実施し、コロナ禍前の参加者数を上回ったことは評価できる。また、アンケート結果についても「とても満足」「満足」が８９％であり、こども達向けに内容を工夫したイベントを開催し高い評価を受けたことは、計画を上回る取組であると考える。今後はさらなる内容の充実や参加者の増加にむけた 取組も期待したい。ただし、アンケートの回収数は前回よりも半数位に下がっているため、アンケートの実施方法には改善が必要である。

・地域貢献に関する事業への学生の参加数（№30）

こども科学教室の開催などにより、中期計画における数値目標（２）地域貢献に関する事業への学生の参加数（目標値：単年度２００人以上）を達成することができたことは、評価できる。

(4) 国際交流に関する目標を達成するための取組

評価委員会評価	法人の自己評価の項目全体では、２項目のうちＡ評価が１項目、Ｂ評価が１とされた。評価委員会としての評価も、全体的には概ね順調な進捗状況にあると評価できる。特にＡ評価とした項目としてさくらサイエンスプログラムを活用した国際交流の取組は、今後の国際交流の充実に繋がる成果として評価できる。	B （概ね順調）

評価結果

評価者	全体項目数	A		B		C		D	
		項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比
法人	2	1	50%	1	50%	0	0%	0	0%
評価委員会	2	1	50%	1	50%	0	0%	0	0%

■特筆すべき事項及び評価できる事項

・国際交流事業の充実（№32）

４年ぶりに JST のさくらサイエンスプログラム※3を活用して海外研究者４名を受け入れたほか、教員や学生の海外派遣を通した国際交流事業の実績を残すことができたことは、今後の国際交流の取組を拡大し、更に充実させることにつながるため、計画を上回る取組として評価できる。

■今後に期待する事項

下記の事項に関しては、年度計画の着実な実行及び中期計画の達成に向け、さらなる取組を期待したい。

・海外語学研修の経済的支援（№33）

支援対象者数を増やすために、支援金額の上限を引き下げたが、海外の物価高騰等を鑑み、学生が語学留学にチャレンジする機会が失われないように検討を続けていくことを期待する。

(5) 教員の資質向上に関する目標を達成するための取組

評価委員会評価	法人の自己評価の項目全体では、６項目全てがＢ評価とされた。評価委員会としての評価も、全体的には概ね順調な進捗状況にあると評価できる。	B （概ね順調）

評価結果

評価者	全体項目数	A		B		C		D	
		項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比
法人	6	0	0%	6	100%	0	0%	0	0%
評価委員会	6	0	0%	6	100%	0	0%	0	0%

■今後に期待する事項

下記の事項に関しては、年度計画の着実な実行及び中期計画の達成に向け、さらなる取組を期待したい。

・授業改善アンケートの実施（№35）

授業改善に活用するアンケートの回答率が年々低下傾向にあるため、学生からの意見を授業改善に反映させる仕組みとして十分機能させるためにも、引き続き回答率を向上させる方法の検討を望む。

また、授業アンケートには、個々の授業がシラバス通りに運営されているか、大学が教育の質を検証する取組の一つでもあるため、その観点からのアンケート内容の確認と回答率の改善の検討を望む。

２　業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するための取組

評価委員会評価	法人の自己評価の項目全体では、５項目全てがＢ評価とされた。評価委員会としての評価も、全体的には概ね順調な進捗状況にあると評価できる。	B （概ね順調）

評価結果

評価者	全体項目数	A		B		C		D	
		項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比
法人	5	0	0%	5	100%	0	0%	0	0%
評価委員会	5	0	0%	5	100%	0	0%	0	0%

３　財務内容の改善に関する目標を達成するための取組

評価委員会評価	法人の自己評価の項目全体では、９項目の内１項目がＡ評価とされ、残りの８項目がＢ評価とされた。評価委員会としての評価も、全体的には概ね順調な進捗状況にあると評価できる。特にＡ評価とした項目として、ふるさと納税のＰＲ用パンフレットのリニューアルや周知方法の改善により、ふるさと納税による寄附額が過去最高金額となったことは、高く評価できる。	Ｂ （概ね順調）

評価結果

評価者	全体項目数	A		B		C		D	
		項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比
法人	9	1	11%	8	89%	0	0%	0	0%
評価委員会	9	1	11%	8	89%	0	0%	0	0%

■特筆すべき事項及び評価できる事項

・ふるさと納税の活用（№50）

ＰＲ用パンフレットのリニューアルや周知方法を改善したことで、ふるさと納税による寄附額が過去最高金額となったことは、地域の方々の関心と期待の表れであるとともに、自主的自律的な大学運営の一助となるため、評価できる。今後も使途などの情報公開を通して、寄附金額の維持・向上に期待したい。

■今後に期待する事項

下記の事項に関しては、年度計画の着実な実行及び中期計画の達成に向け、さらなる取組を期待したい。

・共同研究・受託研究等の間接経費の増額（№48）

中期計画における数値目標として「外部資金の金額（年額）100,000 千円以上」があるが、令和５年度は約 92,000 千円となっており、目標未達となっている。一方で、科研費補助金の増加や企業版ふるさと納税の活用など、外部資金獲得に向けた取組を積極的に行ったことは評価できる。今後もこの流れを維持しながら、共同研究・受託研究数を増加させるなど、数値目標達成に向けた積極的な取組が行われることを期待する。

４　自己点検・評価及び情報公開に関する目標を達成するための取組

評価委員会評価	法人の自己評価の項目全体では、４項目全てがＢ評価とされた。評価委員会としての評価も、全体的には概ね順調な進捗状況にあると評価できる。	B （概ね順調）

評価結果

評価者	全体項目数	A		B		C		D	
		項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比
法人	4	0	0%	4	100%	0	0%	0	0%
評価委員会	4	0	0%	4	100%	0	0%	0	0%

５　その他業務運営に関する重要な目標を達成するための取組

評価委員会評価	法人の自己評価の項目全体では、１３項目全てがＢ評価とされた。評価委員会としての評価も、全体的には概ね順調な進捗状況にあると評価できる。	B （概ね順調）

評価結果

評価者	全体項目数	A		B		C		D	
		項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比
法人	13	0	0%	13	100%	0	0%	0	0%
評価委員会	13	0	0%	13	100%	0	0%	0	0%

■今後に期待する事項

下記の事項に関しては、年度計画の着実な実行及び中期計画の達成に向け、さらなる取組を期待したい。

・低学年向けのキャリアセミナーの開催（№59）

１年次学生へのキャリア形成の動機付けとともに、セミナー参加者が少数であることから、中だるみになりがちな２年次学生への対応の必要性を感じる。２年次は、大学にも慣れ、時間的な余裕のある学年であるが、メンタル面での不調を抱えてしまう学生も多い傾向にあるため、学生支援の充実を期待する。

用語解説

※１：ハゲタカジャーナル

オープンアクセスの出版モデルを悪用して、著者から論文出版加工料を得ることを目的とし、適切な査読を行わない粗悪な学術誌。ハゲタカジャーナルへの投稿では、高額な論文出版加工料を要求されたり支払いのトラブルが発生するだけでなく、掲載後に研究や業績評価に大きなマイナスになる。

※２：インパクトファクター

特定の１年間において、ある特定の雑誌に掲載された論文が引用される頻度を示す尺度で、雑誌の影響度を表す。同じ研究分野の雑誌同士を相対的に比較することが可能。過去２年間のデータを用いて、毎年新たな数値が算出される。

※３：さくらサイエンスプログラム

科学技術振興機構（ＪＳＴ）が行う国際青少年サイエンス交流事業。新たな時代の社会を担う、世界の優れた人材を日本に短期間招き、日本の最先端な科学技術や文化に触れてもらうプログラム。日本の受入れ機関と、海外の送出し機関が作成した交流計画を幅広く公募し、採択している。

前橋市公立大学法人評価委員会　委員名簿

（五十音順、敬称略）

	氏名	職業、役職等	備考
1	伊藤（いとう）　亮子（りょうこ）	公認会計士	
2	小島（こじま）　秀薫（ひでふさ）	池下工業株式会社代表取締役会長 前橋商工会議所議員	
3	後藤（ごとう）　さゆり	共愛学園前橋国際大学副学長	副委員長
4	高山（たかやま）　利弘（としひろ）	群馬大学情報学部学部長	
5	花泉（はないずみ）　修（おさむ）	群馬大学大学院副理工学府長	委員長
6	湯浅（ゆあさ）　睦人（むつと）	株式会社ユアサ代表取締役 前橋青年会議所ビジネス室長	

任期：令和６年４月１日から令和８年３月３１日まで